

大阪日日新聞「旅ペン関西部便り」

●生の迫力 人とのふれあい 25年目の「能学おもしろ講座」

●筆者 山岡祐子

●写真説明 精進潔斎し役に臨む神能「翁」の面。

いかに大切に熱弁する河村純子さん。

大学の学外実習をコーディネートすることになった。4月、真っ先に訪問したのは、上京区にある河村能舞台。河村純子さん主宰の「能楽おもしろ講座」だ。国際観光学部の学生とともに、京のおもてなしや未来の観光コンテンツを探る狙いがある。

既存の能楽解説では皆眠たげ。700年の歴史が途絶えてしまうのではという危機感から1996年に純子さんが始めた。「月刊京都」でも取り上げているが、やはり生の舞台は迫力が違う。能舞台の構造解説から能の歴史、面や装束の話、白足袋を履き檜舞台に上がったの構えやすり足、お囃子の体験、仕舞の鑑賞と、プログラムがテンポよく切り換わる。アニメの話や若者ことばも交えるなど受講者に合わせて工夫されたトーク、自然なおもてなし、能の厳しさを思わせる緊張する一コマ、すべて一時間の中にぐっと凝縮されている。最後、教えなくても皆、スマートに座礼ができるのは、同じ空間をともにした熱量ある純子さんの気持ちに共鳴するからだと思う。

このコロナ禍、一昨年は修学旅行生を中心に年間341件5万人を超えていた講座も、コロナ禍でキャンセルの嵐となった。公演収入に頼る能楽のなかでも小さい施設は厳しい状況。個人、フリーランスである演者たちの財政的支援も問題だ。しかし純子さんは、座して待つよりはと大型の超音波噴霧器、オゾンと紫外線の空気除菌器を買い込み、各種の申請に応募、今年は観光庁の「多角化等のための魅力的な滞在コンテンツ造成実証事業」に採択された。

「如何に自分が生の観客によって学ばされていたかということに気がつきます」と「ハンサム女子」純子さん。苦手だった英語のYouTubeにも取り組み、観客を待ち望んでいる。

(白川書院編集顧問、平安女学院大学客員教授)